

対象	小学校高学年以上
教科	朝・帰りの会
該当 単元	小学5年以上 講話資料
教科書	
掲載日	2020. 2. 12 朝刊 12版



2006年2月、楽天のキャンプで、練習の合間に笑顔を見せる野村克也監督＝沖縄・久米島球場で

野村克也さん死去

84歳「ID野球」捕手で三冠王

プロ野球南海（現ソフトバンク）で強打の捕手として戦後初の三冠王になるなど活躍し、監督としても南海、ヤクルト、阪神、楽天

を率いた野村克也（のむら）さん（1924年11月1日、京都府出身）が11日、虚血性心不全のため死去した。八十四歳。京都府出身。葬儀・告別式は近親者で行

い後日、お別れの会を開く予定。 関連⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛

京都・峰山高から一九五四年、テスト生として南海に入団し、五七年に30本塁打で本塁打王。六五年には打率3割2分、42本塁打、110打点で戦後初の三冠王に輝いた。七〇年に兼任監督に就任。七五年には史上二人目の通算600本塁打を記録した。ロッテ、西



野村克也さんの写真特集は中日Webで。

武を渡り歩き、八〇年に四十五歳で現役を引退した。九〇年にはヤクルトの監督に就任。「ID野球」と称された緻密な野球スタイルを確立し、九八年までの九年間でリーグ優勝に四度、日本一に三度導いた。九九年から三年間は阪神、二〇〇六年から四年間は楽天の監督を務めた。他球団でくすぶっていた選手をよみがえらせる手腕は「野村

再生工場」と呼ばれた。現役時代の通算2901安打は張本勲さんの3085本に次ぎ、657本塁打は王貞治さんの868本に次いで、ともに歴代二位で、打率は2割7分7厘。通算出場3017試合は現在もパ・リーグ史上最多記録となっている。本塁打王九度、首位打者一度。監督としての通算成績は1565勝1563敗76分け。

【考えてみましょう】

○ 野村克也さんに関する記事を読んで、心に残ったことを発表しましょう。

「弱い者は頭を使え」

評伝

興が乗れば一時
報道陣相手におしゃべりを
した。十一日に死去した野
村克也さんが指導者として
一躍名を上げたヤクルト監
督時代。データを重視する
「ID野球」を掲げたが、
その内容は統計や確率論と

いうよりは、実に人間くさ
いものだった。

「一回表の先頭打者、カ
ウト0-0。打者と投手
はどっちが有利だ?」。戸
惑う記者を前に、野村さん
の答えは「投手や」。理由
は明快。「投球は一球一球
に意味がある。ある一球が

あるから、次の一球につな
がるんや。だから最初は好
きな球を投げられる投手が
主導権を握り、打者は受け
身にならざるをえん」

点差、カウト、走者の
有無などさまさまな局面で
の傾向をデータで示し、な
ぜそうなるのか自らの経験
から選手心理を説くのがI
D野球のミーティング。口
癖のように「弱い者は頭を
使え。知恵は無限にある」
と話していた。

母子家庭に育ち、経済的
に苦労して育ったのがアイ
デアマンとしてのベースに
なった。捕手としては肩が
致命的に弱く、その肩で盗
塁を阻止するためクイック
モーションを考えた。打席
の打者に話しかけて集中力
を乱す「ささやき戦術」な
るものもあった。

現役時代は当時人気のな
かったパ・リーグだったこ
ともあり、その華々しい実

績が大きく取り上げられる
ことはなかった。「ON
(王貞治、長嶋茂雄)がひ
まわりなら、ワシはひっそ
り咲く月見草」。巨人への
ライバル心もあったが、そ
の対比が野球ファンにうけ
るといふ計算もあった。

ヤクルト監督として三度
目の優勝を果たした一九九
五年オフ、こんなことを話
していた。「最近、ボール
が硬いから野球はおもしろ
いんじゃないかと思うん
や。硬いから当たると痛い
し、怖いだろ。そこから内

角球の使い方とか、投手と
打者の駆け引きが始まる。
怖いから野手もエラーする
んじゃないか。野球のドラ
マは、突き詰めるとボール
が硬いから生まれるんじゃ
ないか、と」

いつも野球のことを考え
ていた。統計学、心理学、
さらには哲学的にもアプロ
ーチしながら、実に人間的
だった。もう、あのぼやき
交じりのおしゃべりが聞け
ないのが残念でならない。
(写真部長＝前運動部長、
西沢智宏)

イチロー封じた心理戦

現役時代に得意とした「さ

さやき戦術」はもちろん、投手の癖やサイン盗みも、いまのプロ野球では負のイメージがつきまとう。野村克也さんはまだ、知略を尽くした戦い方で野球ファンの支持を得ていたころの傑物だったのかもしれない。

印象深い日本シリーズがある。1995年、野村監督率いるヤクルトがオリックスと激突した一連の戦いだ。ポイントの一つ。「ID（データ重視）野球」を掲げるヤクルトが、天才打者の名をほしいままにしていた若きイチローとどう対峙（たいじ）するか

だった。

シリーズ開幕前に、野村監督は周到に準備した。担当記者を前に「どこに投げても打たれる。お手上げや」とひとしきりイチローを持ち上げた後に、身ぶりを交えて言った。「イチローはホームベースを踏みそうなくらい右足を踏み込んで打つ。ルール違反じゃないのか。でも、あれだけ踏み込むのだから、ポイントになるのはインコースだろうな」。マスコミがこぞって報道するのを計算した上でのパフォーマンスだった。その発言は嫌でもイチローの耳に入る。当然、内角攻め

をイメージしただろう。ヤクルト投手陣が内角に投げたのはボール球が中心だったが、手を出してしまう。外角球も右足の踏み出しすぎを意識したのか、打ち損じが続いた。「彼は球を選ぶより、打ちたがるんです」と捕手の古田敦也。性格まで見越した上でまともなストライクゾーンで勝負しなかった。結局、イチローは5試合で19打数5安打。キーマンを封じ込んだヤクルトが日本一の座に就き、「情報合戦でウチが勝っていた」と野村監督は振り返った。

プロ野球の楽しみ方は時代

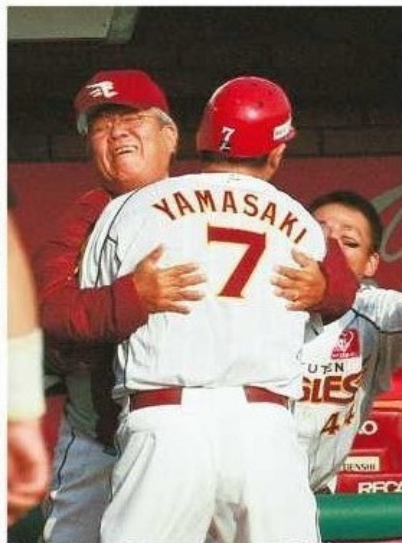
とともに変わる。現在は米大リーグのように卓越した技術、スピード、パワーなどプレーそのものに価値が置かれるようになってきた。ただ、インサイドワークを駆使した心理戦もまたおもしろい、捨てがたい。野村さんの死去は、一つの時代の終焉（しゅうえん）を告げたのかもしれない。それはプロ野球が国民的娯楽として確かな輝きを放っていた、古き良き時代だった。

（西沢智宏）

山崎武司さん「再生工場」に感謝

ノムさん逝く

プロ野球の捕手、監督として活躍した野村克也さんが亡くなった。卓越した理論と、独特の「ぼやき節」。考えることの大切さを説き続けた野球人だった。盛りが過ぎたと思われた選手を再生させる手腕から、「野村再生工場」という言葉も生まれた。私生活では、故・沙知代夫人との仲のよさで知られた。知将にして、情に厚かった「ノムさん」。その死を選手やファンらが悼んだ。●面参照



2009年10月、山崎武司さん(右)と抱き合っている野村克也監督(左)と宮城スタジアムでランを放った野村克也監督

そこから野村さんの「考える野球」をたたき込まれた。本能に頼った打撃を理詰めに変えると、バットに当たらなかつた球がスタンドにポンポン届いた。「毎日、球場に行くのが楽しみになった」。〇七年は十年ぶりとなる本塁打王と初の打点王。四十歳となった〇九年も39本塁打を放った。

二〇〇六―〇九年、野村克也さんが監督を務めた楽天で、打線の主軸を務めたのは中日でも活躍した山崎武司さん(五) 愛知県知多市出身 だった。オリックスを戦力外となり、創設直後の楽天で再起を期した大砲は息を吹き返し、三十八歳のシーズに二冠を獲得。「野球に対する姿勢を一から教わった」と感謝する。「俺の野球人生はここで終わるか」。〇五年の創設時に楽天に加わった山崎武司さんは翌年、野村さんが監督に就くと聞いて途方に暮れたという。ヤクルトを日本一に三度導いたが、報じられてきたのはミーティングの長さや嫌みの多さ。やんちゃな性格を自認する山崎さんは「絶対に合わないと思った」と振り返る。案の定、最初の春季キャンプが始まって「しばらく無視されていた」。半月ほどたったある日、山崎武司さんと呼ばび出した野村さんの第一声は「おまえ、生意気だな」。うんざりしかけたところに言葉が続いた。「俺と一緒に。そう見られないようにしろ」。一時間余り話し込み、互いの誤解されやすさを認め合った。こんな言葉ももらった。「野球を好きになれ。子どもの頃、日が暮れるまで野球をやって楽しかった頃の気持ちで取り組め」。それまで、結果を気にする憂鬱な気持ちで打席に入っていたことに気付かされた。

野村さんの退任後、山崎さんも中日に戻って一三年に引退。その後も食事をともにし、相談に乗ってもらった。「一七年に、妻の沙知代さんが亡くなり、昨夏に会った時は『俺も終わりだ』と嘆いていた。でも、たくさん食べるから『まだまだ元気じゃないですか』と返したの」と訃報に驚きながらも、「いつか指導者として、野村のオヤジの教えを伝えたい」と誓った。(運動部・鈴木智行)

【活用にあって】

野村克也さんは、どういうことを言えば人の心に響くのか考え続けたそうです。

教員の仕事も同じ。話すことが仕事です。子どもたちにどんな話をし、どう心に迫っていくかです。

そのためには、子どもたちに伝えたいことを明確に持つことです。これを伝えるんだということを一言で言えるようにします。次が大切です。これが聞き手の心に響くかどうかの分岐点になります。どんな具体例を挙げるかです。どんなたとえ話をするかと言ってもいいでしょう。

自分の体験を語るだけではすぐに壁にぶつかります。私など失敗談に終始することでしょう。それでは本を読んで話を考えるのはどうでしょう。これには、そんな時間はないという答えが返ってきそうです。

さあ、どうしましょう。

新聞を読むことです。一番手っ取り早い方法です。記事を読んで、心に残ったものをストックしておくことです。新聞には、子どもたちを引き付ける話がいっぱいあります。心温まる話、やる気になる話、身近な問題など、世の中を言葉と写真で映し出しています。これを使わない手はありません。とりわけスポーツに関する記事は有効です。